

第666回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2024年9月度 ——

◇ 開催日

2024年9月17日(火)

◇ 議題

<テレビ番組>

民放連盟賞テレビ教養番組部門出品作品

「軽バンガール ～私がこの道を進むワケ～」

放送日時：2024年5月28日(火)午前1時20分～

◇ その他

九州朝日放送株式会社

第666回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2024年9月17日(火) 16時00分～17時05分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社7階A会議室

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 6名

委員長	藤村	まこと
副委員長	上野	恵梨奈
委員	副田	智幸
委員	サーズ	恵美子
委員	小柳	美佳
委員	泗水	康信

欠席委員数 2名

委員	山根	久資
委員	森	慎二

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	森	君夫
取締役 報道制作局長	大迫	順平
執行役員 総合編成局長	柴田	高宏
報道制作局次長(番組制作統括)	野村	友弘
報道制作局 コンテンツ戦略部(番組プロデューサー)	吉住	啓一
報道制作局 報道情報センター(番組ディレクター)	伊藤	彩香
番組審議会事務局長兼広報室長	吉岡	実
番組審議会事務局(広報室)	松永	俊郎

4. 議題

- (1) テレビ番組 民放連盟賞テレビ教養番組部門出品作品
「軽バンガール ～私がこの道を進むワケ～」
(放送日時：2024年5月28日(火)午前1時20分～)
- (2) 9月・10月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
- (3) 7月・8月 視聴者・聴取者応答状況の報告
- (4) その他

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- 自らの価値観や仕事に対する考え方を揺さぶられた。「新しい生き方」や「新しい働き方」について考えるとともに、「普通の生活」のあり方を考えなおす機会が提供されていた。
- 拠点を持たず車で移動しながら生活する佐藤眞理さんに長時間密着することで、「デジタルノマド」と呼ばれる人の月収や家族の思い、税金の関係など「リアル」が描かれていた。
- 自分らしさとは何かを問いながら生きる佐藤さんの姿は、様々な年代の人に対して生きる上での根幹である「自分らしくとは何か？」を考えるきっかけを与えた。
- 興味本位での描き方ではなく、一つの生き方を提起する構成に好感が持てた。自分で選んだ生き方に伴う責任もしっかりと伝わり「こんな生き方もあるのかな」と思わせる内容だった。
- 他者が価値観を押しつけることは、もうできない時代になっている。従来の「当たり前」が当たり前ではないということを前提に話すお題として、非常に良いテーマだと思った。良いディスカッションが生まれた番組だった。
- 佐藤さんを取り巻く人たちの声や、一般的とされる親世代の考え方の両方をバランスよく紹介することにより、様々な年代の視聴者がより深く考える機会を得たのではないかと。
- ご両親の「100%応援ができない」との言葉は、これぞ密着というシーンだった。「本人の人生」「うらやましい」という言葉から、多様な考え方、生き方を尊重することの大切さを感じた。
- 普通を強いる同調圧力が、人によって努力や忍耐では乗り越えられないものであることを知った。多様な価値観を認め合うことの大切さを教えられた。
- 敷かれたレールや周囲の期待に違和感や生きづらさを覚えている人たち、新しい人生を進もうと思っている人たちに勇気を与える番組だった。

などの評価を頂きました。

一方、気になる点や望むこととして、

- 組織に属し通勤する暮らしがネガティブで旧体質のように描かれていた点が残念に感じた。フリーランスに対して少し誤解を与えかねない表現もあったのではないかと。
- 最後の家族との話し合いの場面は、佐藤さんの生き方が親に「普通」を押しつけられた結果（普

通を押しつけられた子の反発) であるようなネガティブなイメージを与えると感じた。

- 父親の「がっかりですね」などというコメントに対して、YouTube のコメント欄で辛辣な意見も見られたので、放送後のご両親のお気持ちが知りたい。取材後もフォローが必要だと思う。
- 「自分らしく働く」「多様性のある働き方」いずれも耳触りの良い言葉だが、自分の家族が同じ道を選んだ時に賛同できない。女性の車中泊は危険なので、注意喚起も必要ではないか。
- 拠点を持たず移動しながら生活するライフスタイルに憧れるがリスクも伴うのではないか。メリットとデメリットの双方を表現するべきだったのではないか。
- 密着ドキュメンタリーなので佐藤さんのプライバシー保護に問題はないか気になった。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、制作担当者からは、

- 本作は「アサデス。KBC」の年間企画のスピンオフ。「Z 世代」でにくりにされることに違和感を抱いた「Z 世代」のディレクターが同世代の多様な価値観に迫った。
- 「Z 世代」と同様に多様性や多様化という言葉が使われるが、本質的に多様性や多様化が図られることはあまりないと感じている。佐藤さんを通じて多様な生き方や選択について考えてもらうきっかけになればと思い本作を制作した。
- 切り口は「Z 世代」の新しい価値観だが、描いたテーマは世代間ギャップや親子関係、働き方など普遍的なものなので、幅広い世代の視聴者に共感してもらえたと思う。
- 本作により様々な議論が生まれたことは嬉しい。いろいろな人がいろいろな価値観でいろいろな視点から見ていただいたからこそその反響だと受け止めている。当事者意識を持って見てもらえたことにより、良いディスカッションを生む番組になれたのではないか。
- 親世代の意見としては、若年層の早期退職が課題になっているが、考え方を理解するヒントになったというご意見をいただいた。
- 「Z 世代」からは、「こうじゃなくちゃ生きられない」と縛られなくていいという勇気ももらったとか、生きづらさを感じたときにまた見たいというご意見をいただいた。
- 佐藤さんの生き方を伝える上でポジティブな部分とネガティブな部分の両方を構成に入れる必要があった。ご両親はネガティブかもしれないが、リアルな世代間ギャップを伝える上で必要だった。
- 「取材後のフォロー」について、佐藤さんやご両親から「このコメントは消してほしい」とか、コメント欄を閉鎖してほしいという要望があれば対応すると伝えている。
- SNS ではご両親に否定的な声もあるが、アンチというより自分の価値観で述べている内容が多い。賛否両方の意見を大事にしたいので、できるだけ SNS もそのままにしたい。
- 同世代で同性のディレクターが一人でカメラを回して取材に当たったことにより、佐藤さんの素の表情や言葉を引き出せた。取材の内容や、取材対象者との関係性により様々なスタイルから最も合致した取材方法を選ぶことの重要性を学んだ。

などの説明をしました。